

「聴くこと」の文化と教育

京 極 興 一

はじめに

一九四五年の太平洋戦争終結から半世紀、日本人の言語生活は大きく変った。

先ず、書き言葉においては、表記の平易化、識字率の向上とともに、文書作成機器の発達などによって、「書くこと」についての抵抗感が稀薄になった。また、出版物の非常な増加は、「読むこと」の生活が一般に豊かになったことを物語る。もとより、それぞれの変化には質的な問題があるにしても、総じて、書き言葉の生活は、大きな進歩を遂げたと見られる。

また、話し言葉においても、庶民の声の開放、言論の自由の時代の到来は、テレビやラジオの普及と人間関係の広がりと関連して、「話すこと」、特に公的な場面における談話への積極的な姿勢を醸成した。そして、この「話すこと」の発達は、必然的に「聞くこと」の機会や場面を拡大した。このように、話し言葉の生活にも大きな進歩があったといえよう。

ただし、「聞くこと」については、普通に理解する程度の「聞くこと」はともかく、耳を澄まして聞く、心の深部に受けとめるといいたいわば高度の活動「聴くこと」の面において、果して進歩といえるものがあつたであらうか。

もとより、このような活動の実態を明確に把握することは極めて困難であるが、例えば、次の現象はそれを推察させるものではなからうか。近年、児童・生徒・学生をはじめ社会人の中に、精神的な問題に悩む人が増加しているが、その原因には、家庭・学校・職場等における人間関係の問題―コミュニケーションのつまずきを挙げることが多い。それは、周辺の人々の「聴くこと」の姿勢の不十分さにかかわることであろう。また、それと関連して、カウンセラーの活動は現在不可欠のものとなりつつあるが、カウンセリングの第一歩は、「よい聴き手」として接することといわれる。とするならば、これらは、現代社会の「聴くこと」の衰退によつて生じた現象と見られよう。

右のように、近年の日本人の言語生活は、「書くこと」「読むこと」「話すこと」の面において非常な進歩を遂げたが、「聞くこと」については、むしろ衰退しているのではないか、少なくとも問題を抱えているということにならう。そして、「聞くこと」のこのような現状を踏まえ、あるべき姿について思いめぐらすことは、今日の重要な課題であると思われる。本稿は、このような視点から、「聞く

こと」、特に「聴くこと」の文化と教育について考察したものである。

本学の国文科は、平成七年度から、既設の文章表現法の科目に加えて、音声表現法を開設した。日本の大衆・短大において、音声表現法の授業は極めて少ないが、その中であつて、本学が話し言葉教育の充実を目指したことは意欲的な試みであつた。しかし、担当した私は、その授業をいかに行うかについての模索を続けることになつた。

いうまでもなく、音声表現法の中心課題は「話すこと」の実践的指導にあるが、「聞くこと」もそれにかかわる重要な分野である。特に、高等教育の段階においては、「聴くこと」についての学習が大切なのではないだろうか。本稿は、このような考え方による授業内容と、「善光寺寺子屋文化講座」（平成九年八月）における「『聞くこと』の文化」と題する講義内容に関連するものである。

「きく」という言葉

「きく」には、「利く・効く」「聞く・聴く」と表記される二群の語がある。

「利く・効く」は、

目・耳・体・氣・自由・無理・賄賂が―利く 口を―利く 薬が―効く

利き酒・利き手・利き腕・利き所 効き目

などの用例から知られるように、総じて、そのものの力が十分に發揮されることを意味する。語源的には、「聞く・聴く」と通じるとの説もある。興味ある問題ではあるが、現在これについて定説とすべきものがない。「利酒」を「聞酒」、「香を聞く（聞香）」を「香を利く」と書くことがあったのは、「聞く」と「利く」との近い関係を示すものか。

なお、多田道太郎氏は、このことに関連して次のように述べている。

もともとは耳で「きく」のだ。しかし「きく」器官は耳ばかりではない。味を利くこともあるし、口をき

くこともある。いや、香をかぐことだって、「聞香」というではないか。要するに「見る」こと以外のコミュニケーション全体を、「きく」ことはおおっているようだ。（中略）

「きく」とはおそらく「氣が来る」の意味である。

香とか味とかは、こちらの主体に向こうから「氣」としてやってくる。それに対し、受け身の立場でじつと感覚をときすまし、氣を受けいれるのが「きく」ということであり、それゆえに「香をきく」とか「味きき」とかの表現もでてきたのであろう（動詞人間学 昭和五十年 講談社）

次に、「聞く・聴く」については、左の例のように、多数の複合語句や派生語の存在が注目される。

a 聞き―あきる・集める・誤る・合せる・入る・入れる・置く・落とす・覚える・及ぶ・返す・かじる・苦しい・込む・さす・知る・過す・捨てる・澄ます・損なう・出す・ただす・連える・継ぐ・つける・伝える・とがめる・届ける・取る・直す・流す・馴れる・にくい・ほれる・漏らす・分

ける・忘れる

b 聞こえる 聞こしめす

c 閉書 聞き上手 聞き逃げ 聞き役 聞き耳（を立てる） 聞く耳（を持つ） 聞いた（ふう）

d 聴講 聴取 聴聞 謹聴 傾聴 盜聴 拝聴 傍聴 外聞 仄聞 他聞 伝聞

『日本国語大辞典』（小学館）は、右の a・b・c 類の語を約二七〇語挙げてゐる（関連語では、「いう」の約四八〇語に次ぐ）。これに d 類を加えたものが、その全容である。「聞く・聴く」が、このように多数の複合語句や派生語を持つてゐることは、その活動の広さと意味の多様さを示すものにほかならない。

なお、『現代雑誌九十種の用字用語』（国立国語研究所昭和三十七年）の「使用率順語彙表」によると、「きく」は高使用率である。この現象も、右のことを裏付けけるものといえよう。次に、「きく」及び関連語の順位と使用率（千分率）を挙げておく。

いう 三位 一四・三二六%

きく 九六位 一・〇三二%

はなし 一二二位 〇・九四九%

かく 一三三位 〇・八〇九%

よむ 四三四位 〇・二八八%

はなす 四四一位 〇・二八三%

さて、「聞く・聴く」の意味を大別すると、次の二類となる。

(1) 音、声、言葉を耳に感じ取ること

(2) その内容を理解すること

(1) が感覚的行為であるのに対し、(2) は意志的行為である。この(2)には、（理解して）承知する・聞き入れる、（理解を確かめるために）尋ねる・訊くことも含まれるが、総じて、その根幹をなす「理解すること」については、深淺の種々の段階がある。その中で、内容を知るといふ程度の普通の理解行為から進んで、耳を澄まして聞き、心に深く受けとめるというような高度の理解行為については、「聴く」の表記が用いられる。

二「聴くこと」の文化と教育

「聴くこと」によって心に深く受けとめる活動は、古く文学受容の一形態であった。物語・説話などのジャンルの名称自体が受容形態の名残をとどめている。また、説話・談話・講義・唱導等、多くの分野にわたる聞書の類は、「聴くこと」とその筆録の所産であり、更に平曲はじめ多彩な芸能文化もある。このように、「聴くこと」は、古くから多くの優れた文化を生み出してきたのである。

付言するならば、このような「聴くこと」の重視は、「聴かせること」への工夫ともなる。いわゆる話芸はそれを示すものである。

なお、池田弥三郎氏は、「きく」ことの考察が、芸能史研究の観客論の根幹にある問題解明の出発点であるとし、更に、次のことを指摘している。

すでに先師折口信夫の説くところだが、「きく」ということによって、静安の心を乱され、鎮静している靈魂をおびき出され、誘い出される不安・動揺と、それを「きく」ことによって鎮静を持ち来たす魂鎮めの

呪術が、一転して、夜の幽安を文学の境地として発見した過程は、日本の文学研究・文学史研究にとって、ゆるがせにできない問題であろう。聴覚の文学を開拓した赤人・家持らの成績を顧みても、それは大きい未開拓の分野であると思われる（『きく』ということ）『聴いて歌って』昭和五十六年 旺文社）

さて、このような「聴くこと」の文化の中で、意識的にそのあり方や大切さについて論じているのは、仏道修業の世界である。ここには、その中から、道元禪師と蓮如上人の言葉を取り上げてみたい。

道元禪師（一二〇〇年～一二五三年）の教えを筆録した懷^{もよ}獎の『正法眼蔵随聞記』の中に、「聴くこと」についての次の言葉がある。

只須^{ただ}ク先^{さき}ズ我ヲ忘レ、人ノ言ハンコトヲ好ク聞イテ、後ニ静カニ案ジテ、難モアリ、不審モアラバ、逐^おテモ難ジ、心得タラバ、逐^おテ帰スベシ。当坐ニ領ズル由ヲ呈セントスル、法ヲ好クモ聞カザル也（一・九 『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』日本古典文学大系 岩波書店）

法を聞く時は、ただ、ぜひともまず自分というものを念頭におかず、相手の言うことをよく聞いて、それから静かに考えて、もし欠点や、疑問があつたならば、次の機会にでも欠点をあげて論難し、納得がいったらその上で帰依したらよい。その場でよくわかつた様子を見せようとするのは、肝心の法の話をよくも聞いていないのである（水野弥穂子訳『正法眼藏随聞記』昭和三十八年 筑摩書房）

若シ己見ヲ存ゼバ、師ノ言バ耳ニ入ラザル也。師ノ言バ耳ニ入ラザレバ、師ノ法ヲ得ザル也。又只法門ノ異見ヲ忘ルルノミニ非ズ、又世事ヲ返シテ、飢寒等ヲ忘レテ、一向ニ身心ヲ清メテ聞ク時、親シク聞クニテアル也。如是聞ク時、道理モ不審モ明ラメルアル也（一・十四）

もし自分の考えを持っていると、師匠の言葉が耳に入らないのである。師匠の言葉が耳にはいらなければ、師匠の法が身につかないのである。さらに、ただ教えの上でのちがつた考えを持たないばかりではない、世俗の事をいっさい持ちこまず、飢えや寒さ

も念頭におかず、ひたすら身心を無にして法を聞く時こそ、真に身に親しく聞けるのである。このようにして聞くと、道理も不審も、自然に明らかになるのである（同右）

これらの言葉は、仏道修業の基本的心構えとして、「聴くこと」が「我ヲ忘レ」「身心ヲ清メテ」即ち先入観なく無私の姿勢で理解しようとするものであることを求めている。これは、無私に徹したといわれる筆者懷瑩の聴聞の姿勢をも思わせるものといえよう。

蓮如上人（一四一五年―一四九九年）は、次のように言う。

一つ事を聞きて、いつも珍しくはじめたるやうに、信の上にはあるべきなり。ただ、珍しきことを聞きたく思ふなり。一つことをいくたび聴聞申すとも、珍しくはじめたるやうにあるべきなり（『蓮如上人御一代聞書』実悟記二二五 岩波文庫）

「いたりて硬きは石なり、いたりて柔らかなるは水なり、水よく石を穿つ、心源もし徹しなば、菩提の覺道なにごとか成せざらん」といへる古き詞あり。いかに

不信なりとも、聴聞を心にいれて申さば、御慈悲にて候あひだ、信を得べきなり。ただ仏法は、聴聞に極まることなり（同右二九〇）

聴聞は、常に初心に立ち返って、「珍しくはじめたるように」あるべきこと、また、仏道修業は「聴聞に極まる」ことを説いたものである。

なお、道元禪師、蓮如上人の右の文章には、反復表現が多い。そこには、「聴くこと」の重要性を懇切に説き聞かせようとする氣息が感じられる。

右は、「聴くこと」の歴史の中の一齣、仏道修業に限られたものではあるが、このような「聴くこと」重視の考え方は、布教活動を通して一般の人々の生活の中にも影響を及ぼすことがあったのではなからうか。

さて、近代は、日本人が新しい言葉の世界に目覚めた時代であった。話し言葉に限っていうならば、例えば、明治四年十一月十二日に横浜を出航した岩倉使節団は、大嘗会が行われた十七日に祝賀の宴を催し、岩倉具視大使が船中の洋客に向い「演舌」を行った。随行した久米邦武は、『米欧回覧実記』（明治十一年刊）の中に、西欧諸国では

「演舌」がしばしば行われることを紹介するとともに、特に次のように記している。それは、西欧の言語文化圏に入った感慨を伝えるものといえようか。

当使節ノ旅行ニ「スピーチ」ヲ為スハ、此日ヨリ始ル
（第一巻太平洋航程ノ記）

また、福沢諭吉は、明治七年に「演説の法を勧むるの説」を書いた。

演説とは英語にて「スピーチ」と云ひ、大勢の人を会して説を述べ、席上にて我思ふところを人に伝ふるの

法なり（『学問のすゝめ』第十二編）

そして、演説は、わが国には古来なかつたが、今後の議会政治や学問研究の場においては大切な方法であると説いている（第十七編にも同趣旨の論がある）。

このような「話すこと」の広がりに対して、「聞くこと」はどのようなものであろうか。これについての説明は困難であるが、概していうならば、前代までの「聴くこと」の高度の文化的役割を重視した世界は、近代に入り、文字言語の普及とともに縮小の方向に向つたのではないかと思われる。

例えば、外山滋比古氏の「聴聞の世界」の論は、そのような視点から、話すこと・聞くことの文化の衰退を指摘するとともに、復活への期待を述べたものである。その一部を挙げる。

日本の近代文化は目の文化である。言葉については思想、つまり、目、文字、読書によってとらえやすい部分がもつとも尊重され、言葉の調子とか、おもしろさは低級なものとして放置されてきた。(中略)

文字による記録が唯一の信頼できるものと考えられるようになった近代においては、口と耳とによる「不確実」な伝達はすべて正統的文化より一段も二段も低い、二次的なもののように見なされているが、言葉の文化を考えるには、耳の理解を見直すことから始めるべきであろうと思われる(『日本語の感覚』昭和五十年 中央公論社)。

次に、教育分野においては、どのように考えられてきたのであろうか。国語教育は、伝統的に読み書きの教育を主眼として今日に至っている。その中で、明治三十三年「小學校令施行規則」に「話し方」が挙げられたが、昭和十六

年の国民科国語に至ってより明瞭に位置付けられ、実践活動も始まり、戦後の教育に引き継がれる。一方、「聞くこと」については、昭和二十二年の「学習指導要領」に学習目標として取り上げられた。このようにして、昭和二十年代に至り、国語教育界は、本格的に話し言葉教育と取り組む姿勢を見せたのである。私は、昭和二十一年から二十九年までの話し言葉教育の参考文献五十四点を解説したことがあったが、それは、以前と比較して質量ともに格段に充実し、新たな動向と活気を示すものであった(『国語教育』第3巻話しことばの教育 全日本国語教育協議会編 昭和三十年 明治図書出版)。

このようにして発足した話し言葉教育であるが、教室での指導の実態は、その理念に対応したものとはならず、不振の状態が続いているというのが大方の評価である。森島久雄氏は、その原因について、話し言葉軽視という我が国特有の文化的風土や国民性の問題を挙げた上で、教育的な次元から、次の三つの点を指摘している(『学校教育における話し言葉の指導』△『話し言葉』昭和五十五年 文化庁)。

一 話し言葉の能力は日常の生活経験の中で自然に獲得され、向上するという考え方

二 国語科の指導時数の少なさ

三 指導の方法論が明確でないこと

さて、話し言葉教育の中でも、特に不振の状態にあるのは「聞くこと」の指導である。これは、国語教育の現場の状況からも、関係雑誌の情報からもしいうることである。その原因としては、森島氏の指摘に加えて、戦後の日本において、先ず第一に自らの意見を明確に表現することが求められ、それが教育に反映したこと、それと関連して受容の面が二の次になったことを挙げることができるのではないかと思われる。しかし、このような中であつて、西尾実氏が、「聞くこと」の教育の重要性について指摘していることは、国語教育史上に記憶さるべき論と考える。その一節を引用しておく。

つぎに必要なのは、聞くことの開拓である。話しことばにおいて、われわれの関心事は、いつも話すことでしかなかった。話しことばの生活における聞くことの重要さを忘れがちであつた。これが、話すことに関

心しながら、しかも話すことの進歩向上を来し得なかつた根源的な欠陥であつた。(中略)

われわれが、いま、話しことばの生活を確立させるために、あらためて努力を払わなくてはならぬことは、この聞くことの意義に目ざめ、聞く力を育てていくことである。家庭では、話すことの躰に先だつて、聞くことの躰が行われなくてはならぬ。学校では、「話し方」という分科の名称が、「聞き方」を含めているなどというような安易きにとどまることなく、「話し方」とともに「聞き方」という分科が立てられるべきである。そして、文字の教育に書き取り練習があるように、いや、それ以上に、ことばの教育には聞きとり練習が、あらゆる機会をとらえ、あらゆる方法をもつて、行われなくてはならぬであらう。

社会生活においても、一般に、人の話を聞く心の広さの足りないこと、聞く態度のできていないことが反省せられ、それが、社会人として、いかに大きな欠陥であるかを、自ら恥じ、自ら恐れるような通念が成立しなくてはならぬであらう(『ことばとその文化』三

話しことは 昭和二十二年。後に『言語生活の探求』に再録。昭和三十六年 ともに岩波書店

西尾氏のこのような提言は、残念ながら教育界の、特に実践面に取り入れられることはなかったと思われるが、今後、「聞くこと」更には「聴くこと」の教育を考えるうえに生かされることを期待したい。

以上、古くは豊かであった「聴くこと」の文化が、今や多く失われたこと、また、その教育は、今なお未開拓の分野であることを見てきた。このような現状からすると、その文化の復活と教育の育成には非常に難しい点があると感ぜざるを得ないが、また一方、それらの課題への取り組みこそ、現在求められているものと考ええる。

三 文学に見る「聴くこと」の世界

既に述べたように、「聞くこと」の中には、耳を澄まして心の奥に受けとめる「聴くこと」の活動があるが、それは理解し実践することのできない領域である。しかし、文学には、「聴くこと」のすばらしさや奥深さを追求した優れた作品がある。私たちの心が「聴くこと」に開くため

には、百の説教よりそのような作品に触れることこそ有効な手立てではあるまいか。

それでは、そのような作品にはどんなものがあろうか。私は、例えば次の三つの作品を挙げたいが、なおこの他の作品について、大方の御教示を得たい。以下、紙数の関係で、それぞれについて、「聴くこと」に関連する本文の一部を抄出し、参考資料を付記するにとどめる。

1 谷川俊太郎「みみをすまます」(一九七四年 『みみをすまます』福音館書店)

みみをすまます きのうの あまだれに みみをすまます
(第一連)

みみをすまます いつから つづいてきたもしれぬ

ひとびとの あしおとに みみをすまます めをつむり

みみをすまます ハイヒールのこつこつ ながぐつのだ

たどた ぼっくりのぼくぼく (下略) (第二連)

みみをすまます きょうへとながれこむ あしたのま

だきこえない おがわのせせらぎに みみをすまます

(最終連)

この詩は、十六連、百七十九行から成り、身近な・遠く

の、過去・現在・未来の、戦い・平安の等々のさまざまな八十二の「おと」と「こえ」に、みみをすますのである。

「みみをすます」のリフレインは三十四回に及ぶ。

また、中間に挿入された次の連は、「みみをすます」ことのあり方を語る。

（ひとつのおとに　ひとつのこえに　みみをすますこと
とが　もうひとつのおとに　もうひとつのこえに　み
みをふさぐことに　ならないように）

河合隼雄氏は、右の箇所について次のように述べている。

これはほんとうに私が心掛けていることで、われわれカウンセラーが心しなければならぬことです。

（中略）耳をすますというのは、スーッとすんでいるわけですから、その前にいる人以外の音も全部落ちてくるというか、全部入ってきていいようになっていくということ。そういう状況にいるから、われわれの仕事が成立するのです。この「耳をすます」という非常にいい表現は、ほかの国の言葉ではちよつと言いくいのではないかと思います。こういう表現を持つているところは、日本語のなかなかおもしろいと

ころだと思えます（『日本語と日本人の心』第一部
平成八年　岩波書店）

次に、谷川氏の随想を引用しておく。

苦しみのあまり、また哀しみのあまり人が呻くとき、その声は表記できない。へおおでもへああでもない呻きを聴くとき、私たちの心身にうごめくもの、そこに言葉の本来のボディがあり、それを聴きとることは風の音、波の音、星々の音を聴きとることにつながる。どんな雑音のうちにも信号がかくれている、どんな信号にも楽音がかくれている（動いている言葉）（『ん』まであるく）一九八五年　草思社）

2 ミヤエル・エンデ『モモ』（一九七三年　大島かり訳　『エンデ全集3』岩波書店）

小さなモモにできたこと、それはほかでもありません、あいての話を聞くことでした。なあんだ、そんなこと、とみなさんは言うでしょうね。話を聞くなんて、だれにだってできるじゃないかって。

でもそれはまちがいです。ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいないものです。そしてこの点で

モモは、それこそほかには例のないすばらしい才能をもっていたのです。(中略)

モモに話を聞いてもらっていると、どうしてよいかわからずに思いまよっていた人は、きゆうにじぶんの意志がはっきりしてきます。ひっこみ思案の人には、きゆうに目のまえがひらけ、勇気が出てきます。不幸な人、なやみのある人には、希望とあかるさがわいてきます。(中略)

モモは犬や猫にも、コオロギやヒキガエルにも、いやそればかりか雨や、木々にざわめく風にまで、耳をかたむけました。するとどんなものでも、それぞれのことでモモに話しかけてくるのです。

友だちがみんなうちに帰ってしまった晩、モモはよくひとりで長いあいだ、古い劇場の大きな石のすりばちの中にすわっていることがあります。頭の上は星をちりばめた空の丸天井です。こうしてモモは、莊嚴なしずけさにひたすら聞きい入るのです。

こうしてすわっていると、まるで星の世界の声を聞くようとして、いる大きな大きな耳たぶの底に、いるよう

す。そして、ひそやかな、けれどもとても壮大な、えもいわず心にしみいる音楽が聞こえてくるように思えるのです。

そういう夜には、モモはかならずともうつくしい夢をみました。

さあ、これでもやつぱり、人に耳をかたむけるなんてたいしたことではないと思う人がいますか？ そういう人は、モモのようにできるかどうか、いちどためしてみることですね(二章 めずらしい性質とめずらしくもないけんか)

その後、モモは、現代社会の人間性破滅を目指す灰色の男、時間泥棒に挑戦することになるが、そのエネルギーを生み出したのは、まさにこの「聴く」力であった。

子安美知子氏は、右の箇所の解説に当って、シユタイナーの『いかにしてより高次の世界の認識を獲得するか』の中の次の言葉を引用している。

全自然をこのやりかた(自分をまったく無にして他者の言葉や音を聞くこと)で感受するすべを学ばなければならぬ。それによって感情と思考の世界に、ひ

とつの新しい知覚器官の種子がまかれる。全自然がその響きを通して、人間に秘密をうちあけはじめ。これまで彼の魂にとって理解できない響きにすぎなかったものが、いまや意味深い自然界の言葉となる。いわゆる無生物から出る響きにしても、これまでとはただの音としか聞こえなかったものを、いまや魂の新しい言葉として聞きとるのである（『モモ』を読む』第一章人の話を聞く力 一九九一年 朝日新聞社）

3 ヘルマン・ヘッセ『シッダルタ』（一九二二年 手塚富雄訳 角川書店）

シッダルタはバラモンの子として生まれ、すべての者に愛され、喜びを与える存在であつたが、満たされぬ心のままに家を出て、苦行僧となり、また世俗的な物質生活と享樂生活を遍歴する。その放浪の末に、渡し守ヴァズデーヴァに巡り合う。

ヴァズデーヴァは注意深く耳を傾けていた。耳をすましていつさいを彼は理解し、受け入れた―シッダルタの素姓、その少年時代、すべての修行、すべての探求、すべての喜び、すべての悩みの物語を。これこそ

渡し守の美德のうち、最もすぐれた美德の一つであつた、彼は「聴くこと」を理解している点において類まれな人だつた。彼が一語も発しないのに語り手はよく感じた、ヴァズデーヴァが静かに、胸を開いて、待ち受けながら、自分の言葉を受け入れてくれること、そして彼が一語も聞きもらさず、一語もあせつて促すことなく、賛辞も非難もはさまずに、ただじつとこちらのことばに傾聴していることを。このような聞き手に自分の思いを告白し、その胸のなかへ自分の生涯、自分の探求、自分の苦悩を葬ることはなんとこの幸福だろう、そうシッダルタは考えた（第二部 渡し守）

「きみは川の笑うのを聞いた」と彼は言つた。「しかしきみはまだすべて聞いていない。さあ、耳をすませう、それ以上のことがきみに聞こえてくるだろう」（中略）シッダルタは聴きに聴いた、いまは彼はまったく耳となつた、まったく傾聴のなかに身を没し、まったくおのれ自身を離れてむなしく、まったくすべてを吸い入れるばかりだつた。彼は、いま自分が聞くことを奥底まで学び究めたと感じた（第二部 「オー

ム

シッダルタは、この傾聴の達人ヴァズデーヴァの「聴くこと」への導きによって、この瞬間に、

運命と戦うことをやめ、苦しむことをやめた。彼の顔には、いつさいの我欲の絆を脱し、完成を知り、生起の川、生命の流れと一つになり、他とともに悩み、他とともに喜び、流れに身をゆだね、「統一」に帰入した（第二部 「オーム」）

即ち、仏陀ゴータマの境地に入るのである。

以上の三作品には、「聴くこと」の究極の姿が描かれているように思われる。そのすばらしさに触れることは法悦にもたとえられようか。中村草田男の句を掲げて結びとする（『中村草田男全集』第四巻）。

浅間山麓をややしばし登れる個所に、真樂寺なる古寺あり

聴き倦まず古泉湧く甘露音

（一九九八・二・二一）